会　　　　　議　　　　　録

|  |  |
| --- | --- |
| 会議の名称 | 第１回藤井寺市地域福祉計画策定委員会 |
| 開催日時 | 令和７年７月１日（火）午前１０時から午前１１時３０分まで |
| 開催場所 | 藤井寺市役所３階　３０５会議室 |
| 出席者 | 委　員：石田委員長、羽根副委員長、井関委員、谷口委員、松山委員、林委員、北浦委員、福村委員  事務局：藤井寺市　村本、福田、佐伯、東本、今泉、竹田谷  　　　　㈱サーベイリサーチセンター大阪事務所　萬関、西川 |
| 欠席者 | 委　員：藤本委員、松岡委員、上田委員、家口委員 |
| 会議の議題 | １．委嘱状の交付  ２．市長あいさつ  ３．委員長及び副委員長の選任について  ４．地域福祉計画策定に向けて  ５．アンケート調査内容について  ６．その他 |
| 会議資料 | １. 地域福祉とは  ２. 計画策定にあたって  ３. 藤井寺市地域福祉計画策定に向けたスケジュール  ４. 藤井寺市地域福祉に関する市民アンケート調査  ５. 藤井寺市地域福祉推進に関する福祉関係者アンケート調査  ６. 藤井寺市地域福祉計画策定委員会規則 |
| 会議の成立 | 委員１２名中８名の出席があり、本委員会規則第６条第２項の規定により成立 |
| 傍聴者 | ０名 |
| 会議録の作成方法 | 要点記録 |
| 記録内容の確認方法 | 出席した委員の確認を得ている |
| 公開・非公開の別 | 公開 |

|  |
| --- |
| 審　議　の　内　容 |
| １．委嘱状の交付   * 市長より委嘱状が交付される。   ２．市長あいさつ   * 市長によるあいさつと諮問書の交付。   ３．委員長及び副委員長の選任について   * 委員より、学識経験者の石田委員を委員長、藤井寺市社会福祉協議会の羽根委員を副委員長とする提案がなされ、承認される。   ４．地域福祉計画策定に向けて   * 事務局より、資料１「地域福祉とは」、資料２「計画策定にあたって」、資料３「藤井寺市地域福祉計画策定に向けたスケジュール」の説明。   【質疑応答】  委 員 長：資料１に「住み慣れた地域」とあるが、初めて引っ越して来た人や病院から退院してきた人等、住み慣れていない市民も多い。住み慣れていない人も含めてみんなで一緒にやることを前提にしないと、結局新しい市民が協力的になれないのではないか。  松山委員：福祉委員会では、新しく引っ越して来られた方も元々地元で住んでおられる方も様々おられるが、やはり新しく引っ越して来られた方や地元の人ではない一人暮らしの方は、行事等に参加しにくいと聞く。しかし、65歳一人暮らしの方で参加してくれる方が増えつつある。  林 委 員：老人クラブ連合会では、色々な形で参加いただける活動メニューを各単位クラブで用意している。新しく来られた方にお声がけすることを地域で広げていくことが基本になる。そういうことで地域とのつながりができ、結果的にフレイル予防につながると思う。会員はそういう声かけを原則に活動している。  委 員 長：資料１の２行目の「誰もが住み慣れた地域で安心して」の「住み慣れた」を省いて「誰もが地域で安心して」としても不都合はないと思う。他にご意見はあるか。  松山委員：市民アンケート調査は、福祉関係者のアンケートと重複して同じ人に届くことはないのか。  事 務 局：市民アンケート調査はランダムで対象者を抽出するので、対象人数が多いこともあり、重複する可能性は０ではない。異なる内容も入っているので、福祉関係者としての回答と、一市民としての回答をいただければと思う。  委 員 長：そういうことは今までもあったのではないか。  事 務 局：恐らくあったと思う。問い合わせが入ったことはないが、もしかしたら同じように回答していただいていた方がいるかもしれない。  委 員 長：無記名で回答するのか。  事 務 局：無記名である。  谷口委員：私は一人暮らしで、身体障害者福祉協議会に入っているが町内会には入っていない。色々な会議に出席しているが、漢字がわからないので市役所に持っていって何が書いてあるか聞くことも度々ある。そういうことがわかるようにしてほしい。  委 員 長：漢字にフリガナをつけたり、なるべく専門用語やカタカナの用語も、誰もがわかる言葉にしてもらえると嬉しいということか。  谷口委員：そうである。  委 員 長：ぜひそういう配慮をお願いしたい。  ５．アンケート調査内容について   * 事務局より、資料４「藤井寺市地域福祉に関する市民アンケート調査」、資料５「藤井寺市地域福祉推進に関する福祉関係者アンケート調査」の説明。   【質疑応答】  林 委 員：資料４の問24の「孤立死」の部分で、昨年４月に施行された孤独・孤立対策推進法との絡みで、「孤独」という文言も入れる必要があるのではないか。それと併せて、この推進法に基づく今後の計画についての問いかけは必要ないのか。  委 員 長：「孤立死」よりも「孤独死」の方が良い、両方とも含んだ概念が良いなど、色々な意見があると思う。アンケートを作成する際に、このことについて検討されたのか。  事 務 局：ここは前回５年前と同じ調査項目だったので、言葉は大きく変えていない。ただ、ご意見いただいたように「孤立」「孤独」のテーマもあるので、文言を追加することについては検討したい。  副委員長：「孤立死」は、悪いものだというイメージがあるが、要するに、つながりがあるかどうかだと思う。今回のテーマも「支えあい・つながり」とある。ただ、つながりの形自体もコロナを経て変化している。リアルではつながっていないが、ネットではつながっていることもある。そこも視野に入れる必要があるのではないか。アンケートの内容も、直接会うつながりに偏っているように思う。元々つながりが苦手でも、その方に合ったつながり方を見つけている方がコロナ禍以降増えている。どんなつながりがあり、求めているのかという視点も必要だと感じた。包括支援センターで情報便という住民投稿を見ているが、これも参加だと思うし、あの人の投稿が最近なくなったと心配する方もいる。直接見に行くだけがつながりではないと、視野を広げることができればと思う。  委 員 長：地域からすると、一人で誰とも連絡とらずに死ぬと大変なことだと言うが、本人がそういう死に方を望んでいることもあると思う。孤独死・孤立死が悪いような書き方になっていることも含めて、どうか。  林 委 員：孤独・孤立対策推進法の中に地域福祉計画にはめ込む項目があるのか。新たな法律を反映させるべき項目があれば、そうする必要があると思う。  委 員 長：社協の孤立死防止対策事業は、機能しているのか。  副委員長：最近姿を見ないなど、住民からの声があれば見に行っている。あとは、ヤクルトや新聞配達等の民間業者からも連絡をいただいて確認しに行く。福祉委員や老人クラブ、民生委員の日頃の見守りの中で違和感があった時には見に行くなど、何かあった時に動く事業になる。その手前のつながりを持てているのかが抜けている気がする。孤独・孤立について、もう少し整理が必要かもしれない。  松山委員：私達も福祉委員として訪ねているが、一人暮らしの方でも今は元気だから一人で生活しているという方もいれば、身寄りがなく本当に一人の方もいる。それは、お話しないとわからない。本当に身寄りがない人に手を差し伸べることが福祉委員の役目だと思うので、そういう方がいれば社協等につなげていきたいと思う。  委 員 長：たくさんご意見をいただいたが、今日中に結論を出すことは難しい。何かアイデアはあるか。  事 務 局：「あなたはつながりを持っていますか」の中に「地域と触れあうつながり」、「ＳＮＳでのつながり」等の調査項目を設定し、それと併せて「つながりを持つにはどうすれば良いか」という設問を、自由意見形式で設定してはどうかと考える。  委 員 長：地域の人の面倒なんてみない、民生委員は頻繁に来てくれるが、見張られているようで嫌だという意見もある。そう考えると、お節介と親切の差はどこにあるのかと思う。我々は孤立死・孤独死はいけないものだと考えているが、本人が望んでいる場合もある。それも本気で望んでいるのか、仕方がないから意地を張っているのか、わからない。皆さんの意見を聞いていると、孤立死がどうこうというより、つながりがあるか・ないかといった項目立ての方が良いかもしれない。そのための手段はどこにあるのか、なければどうすれば良いのか、という聞き方の方が良いのではないか。あまり孤立死・孤独死という言葉が出てくるのも、ショッキングな感じがする。  谷口委員：こういう言い方よりオブラートに包んだ方が良いかもしれない。  委 員 長：ここについては、多様な意見があることを前提にしながら、事務局で調整の上、委員長・副委員長で確認するということでご了解いただけるか。  委員一同：異議なし。  北浦委員：母親が一人暮らしをしており、まだ70代半ばだが、人とつながることが苦手で住み慣れた地域で住んでいるが、あまり近所付き合いもしたくないタイプである。ＳＮＳもしないし、新聞もとっていないので、郵便物が溜まることもない。心配もあるが、母の考え方もあり、孤独死でも別に構わないという感じがある。自分が死んでしまった時は、家にある物を処分して、家も壊して土地だけにして、あとは好きにして良いと言う。そういう人もいる。  委 員 長：孤立死そのものが悪いとか、その生き方をアンケートで排除するような言い方は、あまり良くない。一点気になっているのは、行政が法律に基づいてケアするというのが従来の福祉の考え方であったが、地域福祉の概念が出てきた時に、市民がどうするかがすごく大事という考え方になった。例えば、資料４の問12の選択肢で「友人、知人」「職場の同僚、上司」の次に「市役所」が出てくる。地域福祉そのものの考え方では、市役所よりも民生委員や社会福祉協議会の方が優先順位は上であっても良いと思う。他にも市役所が先という発想が色々な箇所に出てくる。順番としては、市民から動いてもらって最後は市役所という方が良いのではないか。  副委員長：地域で例えばサロンをしようとか、見守りをしようとか考えてくださる住民も増えている反面、民生委員・福祉委員・老人クラブといった既存の役にのしかかる負担も増えている。新たに地域に参加しようと思っている方々がどこに課題を感じているのかを聞けると、楽になるのではないか。資料４の問23「あなたは、地域の福祉課題を話し合う会議や懇談会（ワークショップ等）に参加したことがありますか。」の選択肢は「ある」と「ない」になっているが、どんな時間帯にどんな方法なら参加したいという回答があれば、もっと地域福祉に参加してくれる方が増えるのではないか。民生委員・福祉委員・老人クラブだけでなく、地域のボランティアや社協、市もそうだが、どこに向かって情報発信・仕掛けをしていけば良いのかヒントになるような回答がもらえると計画が前向きになると思う。積極的に参加してくれる人は、タイミングさえ合えばもしかしたらもっと多いかもしれない。そういう方達へのアプローチをどうすれば良いか、このアンケートで聞けることが一番の近道かもしれない。  井関委員：福祉に関する情報を、市民が受けやすいようなものにすれば良いと思う。  副委員長：福祉を変えるという表現はおかしいかもしれないが、これまでは福祉をしていく・渡すものだったが、情報やきっかけを出していく、皆さんの活動を発信していくことも、役割として増えてきていると思う。  井関委員：勉強する機会はたくさんあるが、市民はその情報に触れる機会がなかなかない。  委 員 長：直接自分のところに介護が必要な人が出る等がない限り、あまり興味関心を持てない。  副委員長：実は隣の方が困っていたとか、そのあたりがもしかしたら我が事になるきっかけかもしれない。  委 員 長：まずは自分で解決という流れを強調した時期があった。それが行政からすると一番お金がかからない良い方法だと思うが、そういうものと困った時には誰でも頼りなさいというバランスが、個人の価値観に任せられている。  谷口委員：広報に色々な情報を載せても良いと思う。  委 員 長：たくさん流れていると思うが、興味関心がない人が見ても我が事になかなかならない。  谷口委員：見てもらうようにしないと、見てくれない人がほとんどだと思う。  委 員 長：そういう意味で、このアンケートも意識付けしてもらうためには良い手段かもしれない。どうすればできるかを聞いてみることも大事である。すべての項目については難しいかもしれないが、問23だけでも時間帯や場所等、参加できる条件を聞く項目があれば良い。  副委員長：問22もできるかもしれない。  委 員 長：条件設定が難しければ、自由に書いてもらっても良い。それは可能か。  事 務 局：問22と23両方に付けると、同じようなことになってしまうかもしれない。そこは工夫したい。  委 員 長：性別については、「１．男性」「２．女性」「３．（　）」で良いのか。戸籍上と自認は違うなどもある。そういう課題を抱えている方にとって、これで良いのか。  事 務 局：あくまで自らの意思に基づくアンケートなので、戸籍上の性別でも自認の性別でも回答の通りに集計を取る。  委 員 長：資料４に「コミュニティソーシャルワーカー」とある。数年前までは全く機能していなかったと思うが、今は機能しているのか。  副委員長：していると良いなと思う。「コミュニティソーシャルワーカー」は制度の狭間という表現をする方もいるが、狭間はない方が良い。流れによっても狭間が大きく変わったりもする。  委 員 長：市役所から社協にいって、多少機能しやすくなかったのか。  副委員長：何をもって機能していると言うかもある。このあたりもしっかり精査する必要がある。  谷口委員：何か困ると市役所より社協に先に行ってと言われる。  委 員 長：それは、社協が相談にのってくれて親切で、それに比べて市役所は不親切だということか。  谷口委員：そうではないが、何か困れば市役所より社協に行った方が良いと言われた。  副委員長：そう思っていただけることは社協として有難いが、社協のことを知らない人も多い。もっと相談があっても良いはずと思っている。そこまでないのは、知られていないからだと思う。  委 員 長：名前は知っていても、実際に何をしているのか、どこにどんな人がいるのかまではわからない人が多いと思う。  副委員長：複合的な課題をお持ちの方も増えているし、価値観も多様化している。一人一人に寄り添いながら一緒に解決方法を考えていくことに時間と手間がかかることも正直あると思う。制度をメニュー表のように渡すのであれば簡単だが、生き方の選択に悩んでおられる場合はすごく時間がかかる。そのあたりが十分にできているのかと日頃から考えている。団体との関係は今までもあって一定の機能は果たしていると思うが、どこに相談して良いのかわからないとか、とりあえず社協に相談したらと言ってくれた人がどう受け止めてくれているのか、我々も課題だと思う。  委 員 長：市役所でも社協でもどこかにつながっていただくことが大事である。困り事があれば自分で解決しようとか我慢しようとか思わず、相談に行くことが大事だと思う。  副委員長：助けられ上手が増えると良い。そうすると、もしかしたらもっとつながりが増えるかもしれない。  松山委員：福祉という言葉に拒絶反応がある人もいる。そういう方達にはどうすれば良いのか。困った時にどうされるのかと思う。  副委員長：困った時に民生委員・福祉委員に言わなくても、市役所に行くとか友達が良くしてくれるなら、ある意味ＯＫだと思う。  委 員 長：多様な意見があるし、価値観や生き様はさまざまで、こうでなければいけないとは言えないと思う。そういう意味では、アンケートをとる、あるいはそれを読み取っても、100％それで施策が決まるわけではない。アンケートはそういうものだとご了解いただいた上で実施することになる。多少の矛盾がこの社会そのものにあることをご理解いただいた上で、いただいたご意見を整理してほしい。  ６．その他   * 事務局より、次回策定委員会の内容・時期等の説明。   閉　会  （終） |